

「エリザベス・ギヤスケル生誕 200 年記念展」 の開催をめぐるって

多比羅 真理子

私が会長に就任したのは 2010 年 4 月、ギヤスケル生誕 200 年という記念すべき年でした。本国イギリスではギヤスケルの生誕の日に、ウェストミンスター寺院のポエツ・コーナーにその名を記念するステンドグラスの銘板が飾られることになりました。これは偉大な作家としてギヤスケルが正式に世に認められたことの証です。この輝かしい行事を記念してイギリス協会では様々な記念イベントを開催していました。日本でも記念論文集の発刊に加え、生誕 200 年を祝う行事を行い、まだまだ低いギヤスケルの認知度をさらに高めたいという議題が 2009 年の秋の役員会で出され、ギヤスケルが日本でどのように紹介されて来たのかを履歴する「ギヤスケル展」を開催しようということになりました。期間はギヤスケルの誕生日の前々日の 9 月 27 日から 10 月 3 日の秋の大会までの 7 日間です。

当時の会長鈴江先生の素早い決断と実行力のおかげで、日本ギヤスケル協会が日本で設立されたとき、多大な協力を頂いた実践女子大学の協力、加えて、実践英文学会が共催の形で全面的なバックアップするという嬉しい報告と、香雪記念館(画像 1)の借用の許可が得られました。私たちはすぐさま、実行委員の 7 名(実践女子大学からは島高行先生、協会から小泉朝子先生、熊倉朗子先生、長浜麻里子先生、遠藤花子先生に会長、事務局長)を選出し、「ギヤスケル展」へ向かって行動を開始しました。

まずは、実践女子大学図書館が本間久雄文庫として所蔵するギヤスケルの稀観本(1890 年代出版の長編小説シリーズ)や初代会長山脇百合子先生所蔵の、美しい装丁の数々の書籍を拝借することが決まり、書物は 1850 年代から主にイギリスで出版された書籍が 70 点、そして戦時中の 1942 年に出版された綾野菊氏の『シャーロット・ブロンテ傳』に始まり現代まで日本で出版された 33 点の翻訳書や研究書が展示用に集まり、香雪記念資料館の第二展示室に展示することになりました。この書籍部門の展示については 13 個の展示ガラスケース、覗きケー

スそして頁抑え用のガラス柵板など展示に必要な物品の全て資料館及び図書館が提供下さいました（画像2）。また適切な展示の仕方を資料館の助教山盛弥生氏に細部にわたって親切にご指導を受けました。隣室の第一展示室は文化史部門としてギヤスケルが生存したヴィクトリア朝時代の社会を知るため、ギヤスケルが生きた当時のマンチェスターの古地図や雑誌を展示、そして、ギヤスケルの作品DVD（BBC製作の『クランフォード』と『妻たちと娘たち』）、会員の大野龍浩先生制作の *Gaskell Places in Photographs* を常時放映して視覚的にも認識してもらうこととしました。

かつてロバート・セシル卿がギヤスケルを「ギヤスケル夫人は細密画家である。（中略）衣装や容貌について細々とした細部まで気がつく女性独特の目ざとさがあった」（注）と評して『クランフォード』に登場する女性たちの衣装描写に言及しています。その評を裏付ける意味で、ギヤスケルが活躍した1850年代の女性のドレスを展示できないか、という案がかねてから上がっておりました。鈴江先生、事務局長の諸坂成利先生と私たちは、古くからの西洋の服飾を多く所有している文化服飾博物館へ赴き、学芸室長の植木倅子氏、学芸員の小宮真喜子氏にギヤスケル展の趣旨を説明し、ヴィクトリア朝時代の服従と従属が求められた女性たちを象徴するクリノリン付きのドレスと、『クランフォード』でギヤスケルが言及している外出用帽子のカラシュの借用を願い出ました。しばらくしてドレス類の借用は快諾されましたが、クリノリン付きのドレスは想像以上に大きく香雪記念資料館の展示ケースには収容しきれないため展示をあきらめざるを得ませんでした。逆に言うと、それほどクリノリンは大きなものだった、と言えます。借用にあたって受けた説明で、(1)展示品はすべて美術品扱いであり、その運搬は専門業者にしてもらい、保険を掛ける、(2)展示品の搬入、搬出には博物館側の学芸員、および主催者側の同道が必要、(3)展示会場の温度は20度前後、湿度55%、照明基準80ルクス以下という展示条件が出されました。会場の香雪記念資料館の展示室はすべてを満たし、かつ、協会でも金銭的、人的にも極力対応するというこで、服飾博物館から『クランフォード』の女性たちが身に着けたと思われる種類のロマンティックスタイルのドレスを2着、戸外用の帽子のカラシュ2点借用することになりました（画像3）。さらに今回の展覧会は学術的目的のために開催されるので、賃貸料を請求しないという博物館側からの朗報も届

きました。

夏休みの暑い天候の最中、会場校の日野の校舎までの長くなだらかな坂を上って実行委員たちは、展覧会に必要な配布物（出展書目録、リーフレット、ポスター、アンケート）や展示品のキャプション制作に汗を流しました。もともと女性会員の多いギヤスケル協会です。クランフォード・レディーたちよろしく意気揚々と集まりましたが、書籍展示会場設定は予想を超える力仕事及要求され、途方に暮れる場面が多々出てきました。そのなか、日本大学の男性大学院生たち、実践女子大学の島先生、そして、エディションシナプスの金子貴彦氏といった男性陣がキャプテン・ブラウンよろしく快く援助の手を差し伸べてくださったときは本当に感謝しました。そして、展覧会開始の3日前の9月24日ドレスが搬入されました。実行委員だった小泉朝子氏がその模様を *Newsletter* 第23号に次のようにレポートしています。

午後には博物館の学芸員二人の手で組み立てと飾り付けが始まったが、180年以上も前のドレスが劣化しないよう、最新の注意が払われての作業だった。このお二人以外には触れることも許されなかったドレスだが、書籍展示の準備に忙しかった実行委員がその手を止めて見入ってしまうほど美しかった。明度を制限されたうす暗い照明の下で見ても、凝った刺繍や少々重たそうな光沢のある生地、形よく並んだたくさんボタンのボタンは美麗で、当時の夫人の暮らしぶりをしのばせる。ドレスに合わせたボンネットも、考え抜かれた色合いと凝った作りでため息が出るほど美しかったが、これもやはり、重量感を感じさせた。『クランフォード』のご婦人たちは肩こりに悩まされたに違いない。見るものにも当時の雰囲気を目で伝える、その圧倒的な説得力は来館者にも強く伝わっていた。

こうして準備が整い「ギヤスケル展」が開始されました。7日間の入場者数は211名を数えたのです。素人集団で始めた企画でしたが、多くの方々のお力を借りて開催にこぎつけたギヤスケルの展覧会でした。しかし、万が一でもギヤスケルの世界を伝えるささやかな機会を提供できたのであれば実行委員長としての責の一端を果たせたのではないかと思います。そして何よりも私以外の実行委員を

含め会員の方々が笑顔で協力くださったことに深謝するばかりでした。

(注) デイヴィッド・セシル『イギリス小説鑑賞』鮎沢乗光・都留信夫・富士川和夫訳、開文社出版、1983年、241頁参照。



画像 1



画像 2



画像 3 (文化服飾博物館の許可を得て掲載しています)

画像 1 ～ 3 の撮影者は多比羅真理子

(実践女子大学非常勤講師)